

生涯にわたって活躍する対人援助職になるために —臨床心理基礎実習での学びを越えた先にある「何か」—

長谷川明弘

(金沢工業大学 心理科学研究所)

1 はじめに

本学は、工科系の大学でありながら、対人援助職の中の臨床心理士を養成する大学院修士課程がある。そこで開講している臨床心理基礎実習に、マイクロカウンセリング(福原ら,2004)を導入し、陪席実習や模擬カウンセリング、そして事例検討会を組み合わせた内容で養成を行っている。

これまで筆者は、対人援助職の養成における学び方と心構えに関して、2つの養成形式の特徴を論じ、パイロットや管制官を切り口とした試論を示し、対人援助職が身につけてほしい事柄として、「基礎能力」を土台とした上に「専門能力」を位置づけて、その技能向上のために、学習が望まれる構成要素を面接技術と知識—心理・生理・社会、その他に分けた試論を展開してきた(長谷川,2007;2008;2009)。

本稿では、臨床心理基礎実習での学びを整理した後、生涯にわたって活躍する対人援助職に求められる条件と対人援助職を能力やサービス提供の姿勢別に区分し、その成長段階を想定した3タイプを提案してみたい。

2 マイクロカウンセリング・モデルを通じた学び

マイクロカウンセリング・モデルは、特定のアプローチというよりも面接技法習得のための教育モデルであり、かつカウンセリングのメタ・モデルでもある(福原ら,2004)。学習者は文献やロールプレ

イから対人援助の中の要素(マイクロ技法)を知り、その枠組みを自らの活動や他の専門職の活動に照合することが可能となる。学習者は、対人援助面接の中の要素、つまり「型」を身につけて一定の技術を修得してもらうことにより、大量に専門家を排出しようとする専門職養成形式(長谷川,2007)での訓練を受けることになる。

学習者は、マイクロカウンセリングモデルを学んだことにより、面接の仕方における自らの特徴を振り返る事が可能となるだけでなく、将来、新しくアプローチを深く学ぶ場合や他のアプローチの実践者との議論や検討にも「共通言語」としてマイクロカウンセリングが活かせることを知ることになる。

3 陪席実習での学び

陪席実習は、昨年度試行的に行われ(山上,2010)、今年度から臨床心理基礎実習へ正式に導入した。学内実習先で臨床心理士である教員が行う臨床心理面接に養成課程の大学院生が立ち会うものである。陪席実習を導入することにより、経験のある対人援助職 1 人に対して少人数の初学者が割り当てられて、学習者が「自由」に学びながら「型」を見出し、自ら獲得するという職人養成形式(長谷川,2007)による訓練を受けることが可能となった。面接者と利用者の臨場感あるやりとりの文脈の中から、何が生じ、どのように面接が展開しているのかを学習者は観察することを求められる。事前

指導や事後指導の中で学習者が捉えたことの再確認や陪席実習担当教員の指導の中から別の視点を提示されて学習者の「学び」が促進されることになる。

4 模擬カウンセリングでの学び

模擬カウンセリングでは、マイクロカウンセリングの講義と役割演技による実習、陪席実習、さらには各学習者が文献から得た知識を統合して、自らが面接者となって臨む経験を持つ。重要なのは、これまで受け身で学んできた学習者が、積極的な姿勢で実際に面接を行うことである。

模擬カウンセリングを通じて、求められている答えは文献の中や自らの頭の中にあるのではなく、むしろ目の前に存在している「人」を相手にすることへの自覚を強めて欲しい。

5 事例検討会での学び

事例検討会では、模擬カウンセリングの自らの実践の適切性を振り返る機会となる。担当教員や修士課程の学生に加えて研究生をしている修士修了生が一堂に会しての検討会である。学習者が面接者となった折の関わり方や方法、考え方について参加者が意見や感想を出し合い。学習者にとっては、事例をまとめる過程での気づきや事例を提示した上での議論を通じた気づきなど多角的かつ多面的な学びが得られる。また他の学習者が提示する事例を聴きながら、自らの視点や自らの関わり方の特徴との類似点や相違点を振り返る事を通じて学ぶ機会とすることが出来る。

特に事例検討会では、臨床現場には、「正しい答え」や「唯一の答え」は存在しないこと、面接者や利用者の周りの各要素の関係の中で構築される「妥当な答え」を自らの責任で導き出すことを学んで欲しい。

6 ナレッジマネジメントの基本的獲得にもつながら臨床心理基礎実習の訓練システム

臨床心理基礎実習を通して学習者は、情報、知識、知恵の再開発とブラッシュアップを行うための一通りの流れを経験したことになる。この過程は、知識や情報の学び方の段取りと共有化を含んでいるナレッジマネジメント (knowledge management)のやり方を知ったともいえよう。この場合のナレッジマネジメントは、対人援助に関する専門職システム内での「形式知」と「暗黙知」を含んだ幅広い知識・情報の共有を諮りながら、学習者の「個」の技能向上に加えて、例えば、「形式知」としての研究論文を公表することによって専門職システム内外への説明責任を果たすこと(長谷川・松岡,2010)が生まれ、そのループが廻ることによって対人援助職システムの改善や拡充につながることを期待できることを指している。

つまりナレッジマネジメントを身につけることを学習者レベルで言い換えると、学習者にとって大学院修了後に対人援助の専門職となった折の日々の業務の中での技能向上につながっていくことになる。例えば、臨床面接記録をまとめ、とりあえず所属集団内外の事例報告や事例検討において発信し、専門職システム内の他者からコメントや意見をもらいながら、学習者が自らの実践を内省し、かつ知識・情報の吸収を行って「形式知」と「暗黙知」を新たに獲得し整理しながら、また研究論文として公表し、それらの活動を統合していく作業になる。

7 臨床心理基礎実習の先にあること

臨床心理基礎実習の次にある科目としては、臨床心理実習が用意されている。臨床心理実習を受講すると多種多様な活動領域での業務や利用者の

を發揮しながら、即興性(improvisation)を持って活動してもらいたい。これを達成するためには、ナレッジマネジメントを身につけ、いろいろなことが出来るための準備として、引き出しを多く持つてもらうために熱意や愛着、食欲さを根底に持ちながら、独創的にかつ創造的な実践活動をしてほしい(筆者もこのような実践を目指したい)。

また上述した対人援助職に求められる条件を揃えれば、本稿で示した対人援助職を能力やサービス提供の姿勢別に区分した3タイプ(行為者;actor、調整・整理者;arranger、創造者;creator)の対人援助職としての成長段階を自らが確認しながら、生涯にわたって活躍することを期待できると思われる。

なお末尾になったが本稿は、ジャズ・ピアニストである山下洋輔氏と脳科学者である茂木健一郎氏の対談(山下・茂木,2011)に触発された。両氏の対談が本稿の執筆に大きな影響を与えている。本稿はあくまで試論であるため、未整理な点や議論の余地が多く残っているものの、このように提示した上でさらなる議論が展開できる礎となることを期待して記した。今後、議論を深めてさらに洗練させてゆきたい。

引用文献

- 福原真知子・アイビィ, A. E.・アイビィ, M. B. 2004
マイクロカウンセリングの理論と実践 風間書房.
- 長谷川明弘 2007 大学院教育に携わって～備忘録を紐解きながら、これからの教育の方向を考える～, Hearty(金沢工業大学臨床心理センター報), 第3号,45-48.
- 長谷川明弘 2008 パイロットと管制官からまなぶ流儀— 対人援助職に関する学び方と心構え—, Hearty(金沢工業大学臨床心理センター報),

第4号,54-55.

長谷川明弘 2009 対人援助職が身につけて欲しい事柄について— 知識・技能の整理に関する試案—, Hearty(金沢工業大学心理科学研究所年報・金沢工業大学臨床心理センター報), 第5号,78-81.

長谷川明弘・松岡智恵子 2010 「ブリーフサイコセラピー研究」の動向と提案: 創刊号から16巻までの掲載論文に基づいて, ブリーフサイコセラピー研究, 19巻1号, 15-27

山上史野 2010 心理面接への陪席実習に関する雑感, Hearty (金沢工業大学心理科学研究所年報・金沢工業大学臨床心理センター報), 第6号,72-74.

山下洋輔・茂木健一郎 2011 脳と即興性-不確実性をいかに楽しむか- PHP 新書.